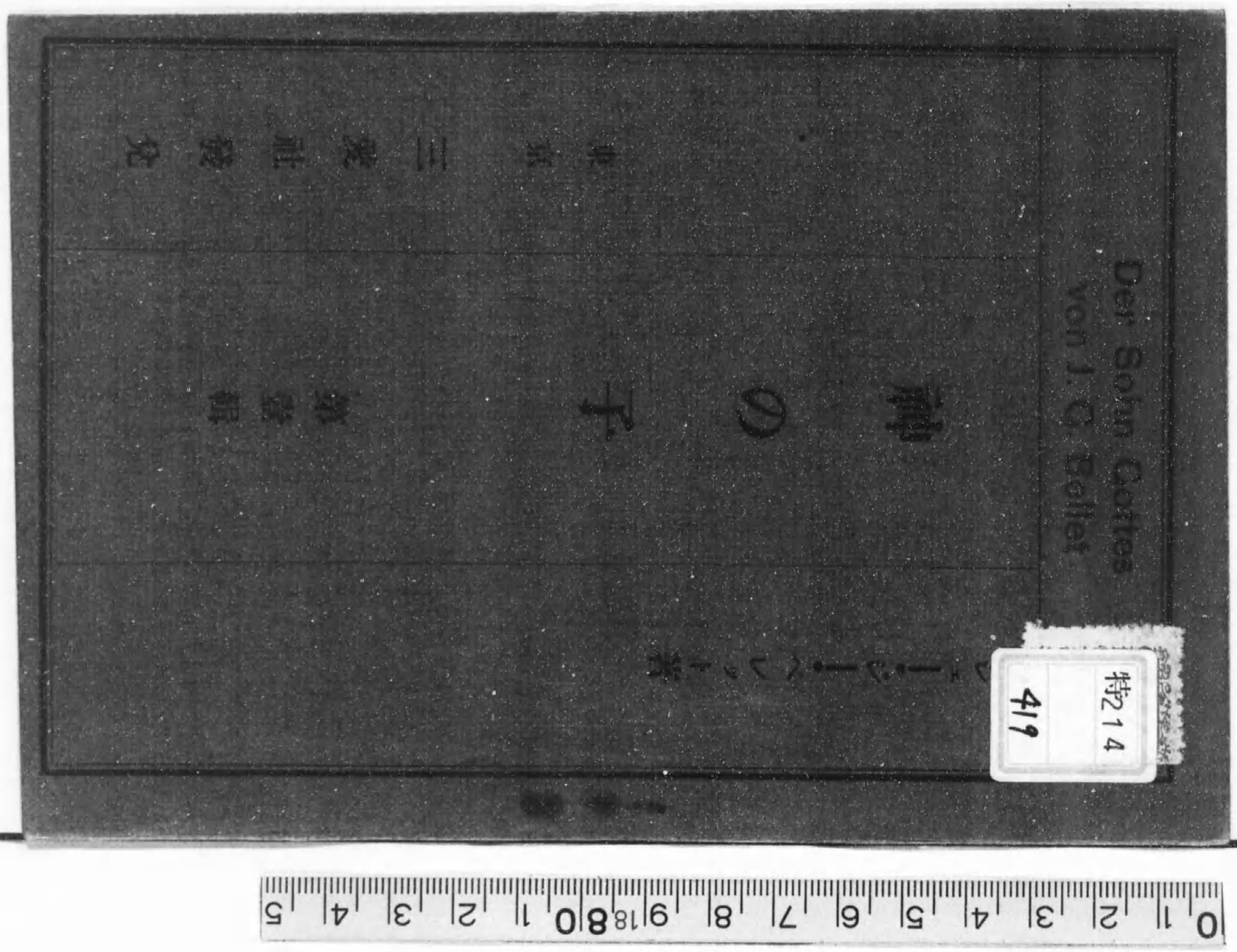
Der Sohn Gottes
von J. C. Bellet
神の子
著者 川俣清愛氏
ハーベスト・パブリッシング
特214
419

背

Der Sohn Gottes
von J. G. Bellet

特14
419

レエー・ジー・ベレット著

神の子

第壹輯

東京 三愛社發兌

神の子

ジェー・ジー・ベレット著

第一章

「うみ給へる獨子すなはち父の懷に在者」（約一〇・一八）

最も恐るゝものは、人を支配する傾ある道理と、活ける地位より墜ちて、間隔思考の渦中に沈淪する事なり。然し神の奥義は、服役に力を供し、艱難と慰安を與へ、若しくは靈の交際を進陟せしめつゝ、實際生活に對し、最高價値を有するなり。

使徒パウロは、自己並に其他を指して、「キリストの使者」、又「神の奥義を司とる家宰」と云へり（哥前四〇・一）。故に吾儕も、各其量に從ひて「役者」、換言すれば、實際的に、個人的に、有ゆる用意と獻身とを以て、忍耐熱心なる僕ならざるべからず、又吾人は他に比して、如何に自己が狹量のものなるがを感せざるべからざるなり。同

時に吾人は「家宰」、實に「奥義を司る家宰」として、神の默示を毀損せずに遵奉せざるべからざるなり。抑も理性を根據とする、一般人には、此奥義ぼ到底理解し得ざるもの。彼等に取りては、十字架は往古より愚、此世の有司、及び自己を智しとする學者には、「奥義に於ける神の智慧」は認められず。扨此奥義は決して彼等に委附すべがらず、吾人の管理は爰に存し、家宰に求むる所は、其忠信ならんこと也。

神の子の人たる榮の保證と確認とは、吾儕の高潔なる管理の主たる部分を形成す。約翰は此榮光に關しては、特殊の熱心もて留意せり、聖書中他の部分にては、猶太教の傾向或は他の原因より生ずる惡を處分する規定法則あり。福音の單純が傳へらるゝ加拉太書に於ては、精しき説明が、細密なる感ずべき例證と關聯して示さる。然るに約翰の書に於ては、凡てが決定され、又無條件なり。爰に於ては「聖主より膏を沃れ」、父と子を敎へ、凡の謊は眞理より出ざるを識り、且つ「子を拒む者は父をも有ず」（壹約二〇二十三）と認す者の以外は、全然遠けたり。

聖靈の智惠が認はす、其認はし方の變差は、大に價値あり、決して之を觀過すべからざるなり。肉に從て日や斷食を守る事は、福音の榮光と自由を狹減するものなれど亦弱きものとして忍ふべきものなり（羅十四章）。神の子の身位、其榮光を狹減する事は併しながら、決して恕すべからず、此點に關しては、前陳の寛恕如何は、全然問題外に屬す。

埃及よりカナンへの旅行其者は、決して眞の巡禮にあらず。多數の人は既に同路を寄遇者、又神の巡禮者とならで、旅行したる事ありき。尙斯かる曠漠、無路の荒野の旅行に、凡ての困難疲勞が必ず伴ふとしても、此れが決して神の且つ天の旅行とはならざるなり。自己を完全に拒絶空虛にし、地上に於ける神の旅人に適はしき、道德的勇氣を鼓しし、假令進むとしても尙足らざるなり。此旅行をして神のイスラヘルの巡禮たらしめんには、イスラヘルの中心に、契約の櫃在るを要し、血もて埃及より買はれし民に擔かれて、信仰によりて、約束のカナンへ進むを要するなり。

是れ荒野に於けるイスラヘルの子孫の職分にして、契約の櫃を荷ひ、此れに隨ひ、自己を潔めざるべからず。多くの場合に於て、彼等の弱點の現はるゝや、譴責や鞭を蒙りき。其特有の職分、即ち契約の櫃を重んぜざる場合には、凡てを失ひ、遂にモロクの幕屋、およびレバンといふ神に象れる星を携ふるに至れり。此れ契約の櫃に對する輕蔑なり、此故にイスラヘル人の道は、カナンよりバビロン、又はダマスコへと移されたり（廐五章、徒七章）。

扨此世界の荒野を通して、神聖と尊敬をもて守るべき、如何なる契約の櫃が、現に聖徒の中心に在るやと云ふに。此は神の子の名に他ならず。此外に如何なる奥義が、我儕の責任と證明に任され居るか。「凡そキリストの敎に居ずして、人を導く者は神を有ずキリストの敎にをる者は、父および子を有り、人もし此敎を有ずして、爾曹に

來らば、之を家に納ること勿れ、彼に安かれと言ふなかれ」（貳約九、十、）。聖徒間に於てすら、キリストを崇めざるものとの間には、此障壁は立てざるべからず。

余は本書に於て、主イエスを神の子たる點より、學ばんとす、此れは確かに主の援により祝福せらるべし。

吾儕は「父と子と聖靈の名に」於て、バプテスマを受けたり（太二十八〇十九）。此語は形式的に、神の奥義の説明を與ふ。即ち子は父と聖靈との如く、神なる事なり。聖書の他の部分は、同じ奥義（父と子と聖靈の神たる榮光）を、別の仕方にて、尚遙かに德義的內面的に吾儕に示し、同時に恩寵と權力に於ける奥義、吾儕の慾望、生活、生長に關する適用を現はすなり。就中此は約翰傳に於ける特例にして、神の奥義をバプテスマに際して云はれたる言より展いて、聖徒たる我儕の理解と心と良心とに與へ信仰と交際の活動にまで導かんとせり。

此れに關聯して、注意したきは、約一〇十四に於て、聖徒は云はゞ、イエスの榮光を遮り、「肉となりし道」なる大眞理を、自己の證明によりて確認しつゝ、又ものいひつゝ現はされ、彼等の見せしめられたる、キリストの人たる榮光、父の生たまへる獨子の榮を、云現はさゞるを得ざる程に感激せられたり。父の生たまへる此獨子に就ては、直に（十八節）「父の懷に在者」として云ひ現はさる、此語は深く吾儕の心に感ずべきものなり。

註　主は種々の意味に於て、始めに生れし者にて、吾儕は多くの兄弟の中より、始めに生れし主との交際を有す。然し又獨子に在し、而も主のみ此獨子に在す。

無論主は種々の關係に於て、「神の子」と稱せらる。主は處女より生れし者として此名を有し（路一〇卅五）、神の詔命（Beschluss）に從ひて此れに在す（詩二〇七）、此れは主の神の子たる關係が如何に多く現はされても常に誠なり。主は子に在し、而も「子」たる名を受け給へり（來一〇一四）。馬太、馬可は、始めに主のバプテスマに際し「神の子」と云ひ、路加は稍進んで、既に其降誕に際して、其「子」たるを擧示したり。然し約翰は尚も遙かに進んで、不測不名の隔れる永遠に遡りて「父の懷に在る子」として、彼を宣傳せり。

主と關係ある人々の中にも、主の御性格に對しては、理解の度、信仰の度に差異あるは、常に免れず。主御自らも、例へば百人の長の、主の榮光に對する理解力は、全イスラヘルにさへ、比類なきを證明し給へり。併しながら、其れは吾儕が主に關して讀む處の「父の懷に在る御子」とか、若しくは「元父と偕に在りし處の我儕に現はれたる永生」（壹約一章）と云ふ大事實を、決して薄弱ならしむるものにあらず。

愛せらるゝ者よ、我儕は此價ある奥義に抵抗すべからず。吾儕の畏るべきは、其愛

の光を曇らす事にして、我儕は其輝きに於て、我等の道途を天の方へと、向けるべく招かれてあるなり。吾儕は主が永遠に、言ふべからざる愛の御父の懷より、主を離すが如き、信仰の告白(寧ろ不信仰)、換言すれば、主が永遠より父の懷に在ししし處の御喜悅、並に御父の御喜を、否定するが如き思想は甚だ畏るべく。余は一致し能はざる處なり。吾儕が知る如く、神の御身體に數ありとせば、其相互の御關係をも知るべく又此思想を欠如する能はざるべし。信仰に迄、父と子と聖靈が指示せられたるは確實なり。其御榮光に於ける御神體は、互に特立するに非で、却て相互に密接なる、交互的關係にあり。此關係の中に愛の大根底、並に凡ての相互的傾向の前影ありと稱するも敢て過言に非ざるべし。

神に體質はなしとか、又父と子と聖靈は、單に異れる名稱にして、同一體を諸種の方面より、觀察せるものなりとの、不信仰的思想を以て、余は滿足する能はず。福音の本體、實質は、斯かる思想によりて破壞せらる。又此體質が相互關係なしとの、不信的思想を以て滿足する能はず。福音中に示されたる愛は、斯かる虛說によりて昏迷せらるべし。

子がベテレヘムに御降誕せられざる以前、神は父に在し給はずやとの疑問は、曾て余に對して發せられき。然り實に、神は永遠より父に在し給ひたり。父の懷は永遠の居所にて、此所に子は父の言盡されぬ喜悅の中に喜びて居給へり。多くの人は斯かる

事を考ふる暇あらざらんも、信者は此奧義を拒否するを許されざるなり。我儕の靈、亦此奧義を人間の虛說以下に置くべからざるなり、信仰は此奧義を、哲學並に虛說に對して宣言す。ユダヤ人すら、諸人が此奧義に對して、困難を感ずるとは思はざりき。主は御自身が神の子なるを證言せし時に、民等は此れを以て、主が自らを神と等しくすると思ひたり、即ち子は卑級、低位の體質を指示せずして、却て寧ろ彼等の考にては、對等を意味すると感じたり。同樣に彼等は、イエスを或る場合には、主が神を其父と云ひ、斯くて自己を神と等しくし神を褻瀆する者と云へり(約五〇十八、十〇卅三)。故にユダヤ人すら、人間の虛僞の計算より生じたる、不可救的、不信の思想を審判せり。彼等は神の住み給ふ光は、人間の道理によりて研究すべからざるを至當とせり。

「父の外に子を識もの無く」てふ語は、吾人の理解を沈默ならしむるに尤も適當なり、吾儕を父および其子と同心ならしむる爲に(壹約一〇三)、窮なき生命が顯はれし事は疑もなく、御子は神として窮なき生命を父と共に有ち給ふなる、計るべからざる奧義を現はすものなり、尙聖書には「獨子すなはち父の懷に在る者のみ之を彰せり」と記されたり。借問す、神以外に、神を彰はし得る者ありや。或る意味にては、神を記載し得ん。然し斯かる記述が、假令世の智惠の極點を以てしても、此は信者の靈に平安を與へざるべし。靈は神御自らより來る表證、默示を要求す。然らば余は問はん、父

の懷に在す御子は、神に在らざるか。

聖書が我儕に指示する、此大奥義に適當する者は、父と子が神の榮に在し、而も此榮光の中に於て、互に此關係に在るを信ずるより他になし。始に神と偕にあり、神の如く、又神と共に永遠に在り給ふ御方は、同時に神の御子なり、神が多くの事物を秘密に付し給ふ所以は、恐らくは或る點まで我儕の靈の從順を試み給ふならん。其故は神は行爲の從順と同樣に、靈の服從を要求し給ふなり。神の下に靈の服從は、吾儕を潔むる働きあり、而して此は聖靈のみが與へ得る所なり、神は常に我儕の靈中に在て自己を高めて、神の子を判斷せんと敢てし、理解し得ざるものは、否認せんとする其力、即ち只サタンの中に見る、不服と傲慢とに等しき、惡德を壓服せんと準備し給ふなりと。

誠に此は吾儕の心に取りて、聖き必適の訓戒なり。使徒は「誰か是譎者、イエスを言て、キリストとせざるものならずや」と問ひ。直に附加へて、「父と子とを拒む者は、即ちキリストに敵する者なり、凡そ子を拒む者は父をも有ず」（壹約二〇廿二、廿三）。此は聖靈の最も嚴なる言現はしなり。而して御子により、又御子に於ての外に父を識るは不能なり。父は決して此他の方法にては知り得ざるなり。故に記されて「子を拒む者は父をも有ず」と。余は子たる靈に於て、「アバ父」と呼び得るなり、詩人は云へり、「我儕も其末なればなり」と、然し神は、御子が神なる榮光に於て、認識さ

れずんば、父として識られざるなり、吾儕は若し、吾儕が受けたる膏が、衷に存るならんには我儕は又子と父とに居る事を、神の權威を以て保證されて、全然確認すべく、又確認したるなり。

若し御子が、神として承認せられずば、如何で父の如くに尊敬せられんや（約五〇廿三）。彼を信ずる事は、處女より生れ、死より甦り給ひし故に、縱し是等が主に關する安全なる眞理にせよ、神の御子と云ふに非ず。否反て彼を信ずる事は、其個有の御本質を信ずる事なり。彼が神の御子に在すてふ信仰以外に、イエスを神の御子と稱うべき方法を余は知らず。吾儕に附與されたる理性は、「眞理者」を、吾儕「眞理者即ち其子イエス、キリストに在り」つゝ識らんが爲めに與へられたるなり、尙此語に附加して、「眞神また永生」と記せり（壹約五章）。

約翰第二書の意味に從へば、「眞理」とは、「キリストの敎」、若しくはキリストの本質に關して、吾儕が聖書に於て有する敎義ならずや。而も此敎義に、神の子たる眞理は包含せずや。記さるゝ所に據れば「キリストの敎にをる者は父および子を有り」。而して此敎を有ずして來らば、之を家に納るべからず。同し書に、亦彼を「父の子」として記されあり、此語は聖靈に庇はれて、處女より生れたるものとして、彼には關せざるものなり。

加之。余は問はん、若し此御子に在す事が承認されずんば、聖書に在る神の愛は理

解し得ざるべし。愛の性質は實に此教義に淵源し。此原因は吾人の心の傾向に對して要求する所あり。「それ神はその生たまへる獨子を賜ほどに、世の人を愛し給へり、此は凡て彼を信ずる者に、亡ること無して、永生を受しめんが爲なり」。又「われら神を愛せしに非ず、神われらを愛し、我儕の罪の爲に、其子を遣して、挽回の祭物とせり、是すなはち愛なり」。尙「神はその生給へる獨子を世に遣はし、我儕をして、彼に由りて生を得しむ、是に於て神の愛我儕に顯れたり」。更に「父曩に其子を遣して、世の救主となり、我儕すでに之を見たり、今その證を作なり」。

此眞理が疑はるゝや否や、此愛は其比類なき榮光を失せずや。又神が吝まで、吾儕凡ての者の爲めに棄てし御方が、御獨子で在さずと主張する人に對して、何と答へんや。若しも吾儕の主が、單に處女より生れたる神の子として「己の子を吝惜まずして」てふ語が、只人間の、而も神の意味ならで理解されんには、吾儕の心は其事の爲めに如何に傷けらるゝや計られざるなり。

吾儕は人間の判斷に便利ならしめんが爲めに、貴き神の言を弱むる事を愼まざるべからず。アブラハムがモリヤの山に赴きし時に、伴ひしは僕なりしか、賓旅なるか、若しくは家族なりしか。イサクは養子なるか、又は愛する獨子なるか。此問に對しては吾儕は充分なる答を知る。而して余は若し主を信仰によりて父の懷に在る子、神の榮光に於ける子として認識せざる時は、亦我を愛して我が爲に己を捨し者(加二〇廿)として、認はし得るやを疑はざるを得ざるなり。

御子はキリストなり、神は御子の御體に於て、服役の全業、膏沃かるゝ事、即ち信者が要求さるゝ、凡てを代て爲し、而も是をイエスの御體に於て爲し給ひき。此故に吾儕は「神の子イエス、キリスト」と稱ふるなり。獨子、キリスト、ナザレのイエスは同一體なり。其御本來の獨特の榮光、其服役、及其取り給ひし御人體より、斯く異れる名稱を以て主を見るなり。

其榮光より、萬物の後嗣たる時までの、驚くべき行程を辿る時は、讀者よ、我儕は如何なる發見を、其本體に關して爲すならん、箴八〇廿二—卅一、約一〇一—三、弗一〇十、西一〇十三—廿、來一〇一—三、壹約一〇二、默三〇十四を讀み、此等の榮ある辭に於て、現はされたる主を追想せよ。實に此等樣々の光に於て、爾の信賴する御方、爾の爲めに凡てを棄て、昔も今も此途を歩む御方を熟慮し、果して爾が主と其途より離れ得るかを余に告げよ。

主は父の懷に在しき、此處に永生命は父の傍に、神に在し、而も神と偕に在し給ひき。神の御計畫に從て、地の元始より、地の定形なかりし時より、彼處に在しぬ。其時彼は、凡ての秩序と壯麗に於ける萬物の造主に在し、次に萬物が罪と滅亡に陷りし時贖主となり、終に其回復せらるゝに及んで、萬物の後嗣となり給ひぬ。余は斯くと信仰によりて主を觀、又斯くと語りぬ。吾儕は主が神の永遠の御計畫の中に在し、處

女の胎に在し、此世の苦難の中に在し、死より甦され給ひしと云へり、彼は天に在て榮光と尊貴とを以て冠せられ、萬物の後嗣又首として權力尊敬を以て裝はれて在し給ふ。永遠より定められたる御父の懷に在るてふ地位を、主より取り離さんか、其永遠より永遠迄、上の如く發展せられし、此貴重なる奥義に對する價値と喜悅とを失はずや。余は右の如き主の御性格を認めざる人が、果して何を宣傳し得るやを理解する能はず、尙又父の與へ給ひし御子は、其獨子に非ずと認むる信仰には、余は到底合致する能はざるなり。

吾儕は若し主を、其榮光の寶座まで、全道程に於て觀察するの能力あらんには、此は如何に樂しく幸なる事ならん。此道程到る所に於て、吾儕が主は神の全き御滿足を、終始其御特權と、幸福なる驚くべき變化とをもて、喚起し給ひしを見る。

聖書は此等凡てを、追及すべく吾儕を導くなり。主が世の基を置かざる前に、父の懷に在りて有ち給ひし喜は、我儕此を語るに不能なり。愛の隱家なる其懷、此愛と關聯する其喜は、愛其者の如く、人の言もて云ひ現はし難けれど。凡ての神の御行爲の中心、又神の有ゆる御計畫の基本として、此愛せらるゝ御方は、同時に神の御享樂なりき。此地位此性質に於て、箴八〇廿二—卅一は主を我儕に示すなり。此驚くべき數行に於て、智惠卽ち御子は、世の始まる前、神の御計畫に固く定められたる、神の有ゆる行爲と目的の大根源、創成者、又維持者に在し給ひぬ。此事は新約の諸所に記されし、（約一〇三、弗一〇九、十、西一〇十五—十七）。凡て此等に於て、主は「我はその傍に在る懷の子として、日々に欣び恒に其前に樂み」と認はさる。

時充ちて神の御子は、處女の懷に置れ給ひき。此秘密を誰か探り得ん。而も事實は正しく是なり。が此れは喜にて、一つの新機會となり。天使は此れを現はし、ベテレヘムの野に在る牧者に告げんが爲に降りたり。

神の御愛子は、今や新形體を取りて、異る行路を歩み給ふ。苦痛の下、服役の中に人の子として地上に現はれ給ひし。而も到る處、永遠の秘れたる時代の如くに紛らはず、「此は我心に適わが愛子、—わが扶くるわが僕、わが心よろこぶわが撰人をみよ」てふ、神の言盡し得ぬ御悅を惹起し給ひぬ。斯くの如く、御父は此罪に汚れし地上に於ける、主イエスの御道筋を追跡して、其變らぬ御喜を云ひ現はし給ひぬ。

此は我旨に適ふわが愛子てふ御聲は、二度聞えたり。聖き山、ヨルダンの河邊、榮光の日、並にパプテスマの折（太十七章）。パプテスマが服從の始めの證なる如く、榮光は王國の豫表なり印なり。斯の如く神の御目は、主イエスを汚れ奈落せる世に於て、僕の寂しき道に於て追踪し、若くは千年王國の榮光の王位に於て眺め給ふとも、同し御喜を與へ給ひぬ。永遠より永遠まで全道、神は完き御喜を、主イエスの中に認め給ひぬ。間斷なく停滯なく、而も其喜は種々樣々なりき、事情機會の異るに係らず、此御喜は常に完全に、而も深かりき。此喜を惹起し給ふ主イエスは、常に同し御方に在

せり。換言すれば、喜其者に在し給ふ。縱し御喜の原因は異る場合ありても、度合に於ては變る事あるなく。實に此御方は永遠より永遠まで、全然汚れず居り給ふ、父の懷に在し給ふと同しく、處女の胎内に在ても、聖き御方、其馳場の始も終も潔く、僕としても、王としても完全無缺、無限の完全は凡てに現はれ、同し御喜が凡てに在りき。

此深く稱讃されたる主(主を觀る場處と方法に係らず)は、永遠の古より父の懷に居給ひし御方てふ、思想を以て心が充され、而も此思想が、聖靈によりて靈に確と保持せらるゝ時は、靈を不安にする多くの傾向は束縛せらるゝものなり。處女の胎に在りしは、父の懷に在ると同一の御方とは、不思議の思想ならずや。翼ある「セラビム」が禮拜したる、舊約の威嚴あるエホバは、ガリラヤのイエスとは何たる思想ぞや。主は神としての如く、人としても疵なく、永遠の懷に於ける如く、人體に於ても潔く、世の基を置かざる先に父の喜にてありし如く、此世の不潔の中に於て、無垢の御方に在し給ふ。

此奥義もて靈が一貫せらるゝ時は、實際心に起る多くの思想は、忽ち其報答を發見す、斯かる奥義の前に在て、誰か多くの人が談る如く談らんや、此榮光が靈の前に立つ時は、再び翼は面を覆ひ、靴は足より脱されざるべからざるなり(賽六〇二、出三〇五)。

約翰第一書に於ける神の教訓は、吾儕に靈の交は、神の御子を觀察する方法如何によりて、影響さるゝを認識せしむると信ず。其故は此書に於て、愛は御子なる賜物に於て現はれ、其愛は、謂はゞ吾儕の居る領域住所なればなり。されば、若し御父が御子の賜物に於て、單に女の裔を與へ給しとせんか、吾儕の活動する領域は卑近のものなるなり。此れに反して此賜物に於て、永遠より父の懷に在りし御子を認めんか、我が思は此愛より昇りて、吾が採る場面も亦高等の性質を帶ぶるに至らん。斯くて靈の交は影響せらる。

去り乍ら他の信者との往來に於て、多くの靈魂が信仰の單純の故に、眞理の少部分を喜び、而も其喜が多くを知れる他の信者に過ぐるを見る。さて此は約翰第一書に於ける思想と觀察とには抵觸せず。愛が吾儕の住所、此故に吾儕の交の性質が、愛の理解に關係するは不變の眞理なり。されば吾儕は交の力を減し、斯くて神に在る喜を賭するが如き事を爲さざるべし。故に缺點は我儕が主の中に有つ榮光ある物を、價値するを屢知らざるに歸せずんばあらざるなり。

御獨子卽ち父の御子は、喪はれたる罪人の爲めに、神の良き御旨を爲さんが爲に、自らを卑くし給ひしも、罪人が此れを機會に、御子を輕蔑するを決して許し給はざりき。約五〇廿三を見るに。主イエスは神の御子に在し、斯くて御自身神と等しく在すを明かにし給へり。然らば御父は主の此御言を保證し給ふやと云ふに。「子を敬はざ

る者は之を遣し父を敬はず」との如く、御子に對して捧げられたる尊敬を奪ひて御自身のものとは爲し給はざるなり。

約翰第一書を一見すれば、父老、壯者、小子と區別し(第二章)、父老は「元始よりの者を識り」、「キリストの敎にをり父および子を有つ者」と認せり。卽ち彼等は謂はゞ力强く膏沃かれし者にして。御子を通しての父顯現を、靈の深き注意を以て眺め(約一〇十八)。子を見て父を見(約十四〇七—十一)。子と父との言を守り(約十四〇廿一—廿三)。子が父に在り、彼等が子に在り、子が彼等に居るを識り彼等は孤子にあらず(約十四十八—廿)。

「壯者」とは、惡(世をしてキリストの奧義を拒ましむる惡(壹約四〇一六)に勝てる者を云ふ。故に彼等は「父老」の如くに、彼の奧義の充ち足れる力に在りて立たざる者從て勸(すゝめ)を要す。使徒は就中世に屬する者の危險を示して、彼等を戒め、同時にキリストを拒む靈に對しては、既に勝利者なるを思はしめたり。

「小子」とは、既に父を識れる者を云ふ、されど彼等は尙「小子」、故に訓戒、敎誨、督責を要す。彼等が父を識る事は、尙不完全にして、子卽ち元始よりの者を識る事、「父老」の如くにあらざるなり。此故にヨハネは、キリストに敵する者を、眞理若くはキリストの敎を拒む者と表示して。彼等を戒め、子を拒む者は父をも有ずと敎え、彼等が沃がれたる膏其衷に存すれば、確かに父と子とに在り、尙父の家には此膏を沃がれざる者は一人として存し得ざる性質なるを敎え。子が約束したる約束は、永生命なるを憶はしめ。終に使徒は、御子の顯現の日に恥ざらん爲に、膏の敎ゆる如く、恒に主に居る樣訓戒せり。

故に此書は、殊更に御子の御性格、卽ちキリストの敎に關して示すものにして、父老、壯者、小子の別は一般の信者の性質に在らで、此眞理に對する理解の度、若くは關係を云ふものなり。使徒は其書全體に於て、極力主たる御子を示し、此目的は卽ち父の御子なり。始より終まで繰返して、父の御子の事が話しせらる。潔むるものは御子の血、父の前に在る保惠師は卽ち御子。吾儕に膏沃き給ひしは御子、惡魔の業の毀れん爲に顯はされしは御子。吾儕信仰すべく求めらるゝは御子の名。愛の何物たるを示さん爲めに遣されしは御子。世に勝たしむる者は御子に對する信。神が證し給ふは御子。吾儕の生命は御子に在り。吾儕に聰明を與へん爲めに來給ひしは御子。吾儕の在る御方は御子なり。彼は御子、眞の神又永生にぞ在す。

以上の事は、凡て約翰第一書に於て、神の御子に就て記されたる處なり。卽ち御子は此書の主たる部分を形成し、父老、壯者、小子の別は此目的物に對する關係に基き實に我が信ずる處によれば、此目的物が彼等の心に理解され、了解さるゝ程度如何に存するものなり。

同書に於て、約翰は吾儕が神より生れたる證據又要素として、愛と義とに就て多く

言明せるが。同時に此教と共に、キリストを眞に識るや、僞て識れるやの問題を告げたり。然も此は全く實際と理論とに區別したるには在らずして。縱しや凡てに此性質あるにせよ、愛と義との實行も、若しや神の子を識る事なかりせば、其靈魂が神より生れたるの證據とは、少しだにならざるなり。

主がユダヤの都や、村落を巡られし際に、預言者イザヤの目が伴ひたりとせば、必ずや絶へざる禮拜に奪れしなるべし。主の榮光を彼は目擊せり。即ち高くあがれる御座に、エホバの座したまふを見しに、その衣裾は殿にみち、セラビムは翼をもて、其面をおほひつゝ、主イエスに在る神の榮光を認はせり。イザヤは「彼の榮を見しにより、彼に就て如此は語れるなり」(賽六〇、約十二〇四十一)。吾儕も亦信仰によりて、其名を信じ、其爲人を見、謙りて世より棄てられたる、ガリラヤ人の覆によりて隱されたる榮光を識り、御子イエスを斯くと見ること肝要なり。

最後に余は、主が僕に糧を時に及びて予へさする事に關して、言ひ給ひし處を追想せん(太廿四章、路十二章)。我儕は此糧を腐らせぬ樣注意せざるべからず。「爾曹みづから愼み、且つなんぢらが聖靈に立られて監督となれる、其全群を愼み、主の己が血をもて買給ひし所の敎會を牧ふべし」と、パウロは言ひ。「爾曹の中にある神の羊の群を牧へ」とペテロは述べたり。神の敎會、神の羊の群は、「神に育られて長つ」とは不思議の言ならづや。

愛せらるゝ讀者よ、僕の糧を腐敗せしめんとする、敵の盡力に對して、吾儕注意せざるべからず。神の御子に關する使徒ヨハネの敎、並に敎會即ち神の集會に關して、パウロの其れは、今日に當ては適時の糧なり、我儕は愼んで、神が其聖徒の爲めに供へ給ひし糧へ、裝飾或は人間の智識を加味せざるを要す。マナハ天より降りし儘にて集め、旅の軍士を天のパンにて養ふ目的にて、持歸らねばならぬなり。

パウロは聖靈によりて、「兄弟よ爾曹の德を建、かつ凡ての聖られし者の中に於て業を爾曹に預る能力ある神、および其恩惠の道に、今われ爾曹を委ぬ」と云へり。

第二章

「それ道肉體と成て我儕の間に寄れり」(約一〇十四)

聖書に於て見出し得る、「肉と血」の歴史よりは、死が罪の故に來りし事を學ばさる。首たり代表たる者がアダムである萬人に取りては、「汝之を食ふ日には必ず死べければなり」てふ聖語は適合す。然し約束されたる女の裔、即ちアダムに依りて代表されぬ御方に關しては、蛇に向て、「汝は彼の踵を碎かん」と言渡されたり。故に此裔の死は、其誕生の如く、特別ならねばならぬ。誕生に於ては女の裔、死に於ては踵を碎かるゝ筈なり。時の充つるに及んで、約束の此方は女より生れ給ひぬ。潔むる者(來二〇十一)、神の御子は、肉と血とを具へ、聖なる者(路一〇卅五)とぞなり給ふ。

死は此方に對して幾何の要求を有するや。極めてなし。如何樣なる要求が、永遠の契約により、其踵に對しなされありても、死は其肉と血に對し幾分も、此れを有せざるなり。此祝まれたる御方には、謂はゞ神の御豫定によりて、其踵の碎かるゝ事の可能が適用され得べさも、彼は決して死に服從すべきにあらざるなり。

神の此御豫定通り、主は御自身の神たる喜に從ひ、「視よわれきたらん」の語をもて御自分を棄て給ひ。神を崇め、罪人に平和を與へん爲めの、高尚なる目的によりて、「僕の貌」をとり給ひぬ。是に協ふて主は定れる時に於て、「人の如くなり」「人の如き形狀にて現れ」、謙遜より謙遜、終に「十字架の死をさへ受け」給ひぬ(腓二章)。

註　若しも主イエスが神と匹く在し給はずは、此事出來給はざりしならん、其は神よりも劣れる凡ての受造物は、實に其創造者の僕なればなり。ユダヤ人は其耳を錐にて刺とほされて、他のユダヤ人の僕と喜びてなり得ん(出二十一章)も、凡ての受造物は、其創造者に對して實に僕なるてふ、單一なる理由の故に、喜んで神の僕となり能はざりき。

主イエス御全世、終始此道を辿り給ひ。此「僕の貌」もて、「神の體」なる其御榮光を藏ひ。人の榮を受ず。其遣し給ひし御父を榮め、自らを榮めず。聖語の示す如くに、御自らを世に現はさんとは爲し給はず。而も是等凡ては其とり給ひし「貌」の故にして、其完全なる顯現は、福音を告げ給ふ事に於て明示せらる。

納稅の義務ある臣民の貌の下に、凡ての地と海とに命令する御方の體を隱し。人は主に納金を要求し、少くともペテロは、爾曹の師は納金を出さゞる乎と尋ねられぬ。主は御自身が與ることなきを說明し、而も礙かせざらん爲に、御自らとペテロとの納金を拂ひ給ひしが。此際に當ても、主は「地と其中に充つるものは主のものなり」と記されたる御方に相違なかりしなり。其故は海の魚に命じて、入用の金を持來らしめて、納金を集る者に渡し給へばなり(太十七章)。

是は「神の體にて居り」、「神と匹く在るところの事を奪掠と意はず」、淵の寶に命令し、神の御手の受造物を、御自分の如く左右し得る御方が、僕の貌をとりし、尊き奥義の適例ならずや。此見えず過行く出來事によりて、非常の榮が雲を破りて輝きぬ。凡ては主とペテロとの間に起りたるも、此は僕の貌、執權に服從する者より（羅十三〇一）輝き渡る神の體の表證なり。地の富は主が他に貢を納めんとし給ふと、同瞬間に其貢を納めたり。尙他の場合にては、注意されざる客、新郎に在らで、創造者として、婚姻の饗應を供へられ。其榮を顯はし、弟子は主を信じたり（約二章）。

主に關しては尙、「彼は競ふことなく喧ふことなし人街に於て其聲を聞くことなし」とあり。傷る葦を折ることなく、寧ろ退き給ひぬ、而も凡ては是れ「僕の貌」をとり給ひしが故のみ。されば此際に引照さるゝ舊約の聖語は「視よ我が選し我僕」とあり（太十二章）。

「天の休徵を見せよ」との、パリサイ人の要求は、主に自己を高めしめんとする試なり（太十六章）。パリサイ人は、恰も惡魔が、主に殿の頂上より身を投下せよと要求し、兄弟が「己を世に顯せよ」（約七章）と云ひしと、同樣に試みぬ。然し完全なる僕に取りて、如此矛盾はなく、ヨナの休徵のほか、休徵を予られじと、主は言給へり、此休徵は即ち謙卑の休徵にして、世が沈默の尊敬に於て、主イエスに服從するの休徵にはあらで、却て此世の主が、外見上一瞬時、主に勝てる休徵なり。

神の完き僕の此御足跡は、實に驚くべき又榮あるものなり。ダビデとパウロは、恰も聖き山上のモーセとエリヤの如く、主の兩側に在て、自己を隱す僕の榮を稍反照す。ダビデは獅子と熊とを殺し、パウロは第三の天に携へられしが、兩人とも、此事を多言せざりき。斯る行爲は完けき僕の榮の美しき反照なり。然も彼等並に聖書や聖徒の中にある同樣の人々も、此を根元の御方に比ぶる時は、如何に莫大なる差異あるよ。主は「神の體」を、「僕の貌」もて隱し。ダビデが獅子と熊とを殺せし時に、ダビデの力、使徒パウロが携へられし天の御主人に在し給ひぬ。而も人の如き有樣にて在し給ひぬ。

同樣の事を、聖き山の頂と麓とに於て見る。頂上にて主イエスは、其撰び給ひし者に對して、暫時榮光の主に在し、麓に於ては、人の子の死より甦るまでは、爾曹の見し事を人に告ぐべからずと命ずる、單のイエスに在し給ふ（太十七章）。

暴風の海上に於ける船に在す主イエスを眺むれば、勞れし工人として、甘き睡眠の中に横り給ふ。是れは主の人間に見ゆる形狀なるが、其下に神の體が隱され。起きて「風をその掌中に聚めし者」、「水を衣につゝみし者」（箴三十〇四）として、風を斥め海を靜め給ひき（可四章）。

時としては主イエスは、イスラヘルのエホバたる其充ち足れる多面的の榮光に於て我儕に現れ給ひき。昔の日に於てイスラヘルの神は、大海の受造物に命令し、大魚を

してヨナを呑ましめ、定れる時の間、ヨナの墓場とせしめ給ひし。其如く、主イエスは當時甚だ多くの魚を、ペテロの網に入れしめて(路五章)、此の大なるひろき海(詩百四篇)の富の主として、御自身を現し給ひぬ。是故に海中に動く大小の動物は、昔も後もエホバに在す、イエスの言に服從するを我儕は識る。

イスラヘルの神は曾て、地と海の凡ての主として、語ること能はざる驢馬を用ひて、豫言者の狂を罰し給へり。而も尙特殊の仕方に於て、契約の櫃が、ペリシテ人の地より引返されねばならぬに際して。其櫃を引く車の牝牛に命して、其天性には極めて反對なるに係らず、ベテシメシの方へ眞直に、近路通りて赴かしめ給へり。此イスラヘルの神の同し榮と力とを、主イエスは用ひ給ひき。時に及んで眞の契約の櫃なる主御自身は、歸途に着き給はねばならざりき。御生涯の終に於て、主は其榮に於て、エルサレムを訪はねばならぬ時が來り。シオンの王として、王都を通行し給ふ必要ありき、牝驢馬は其榮に於て、御用の爲めに備へられ。主は之に乘り、全地の主の威德と權利に於て、通過し給ひぬ。牝驢馬の持主は、「主の用なりてふ」要求に從はざるを得で、其自然に反して驢馬を遣せり。(可十一章、路十九章)。

斯く主は、イスラヘルの神の獨特の榮に於て、再び此處に輝き給ふ。此要求し給ひしは、ナザレの賤められしイエス、木匠、又木匠の子に在し給ふ(太十三〇五十五、可六〇三)。御身を蓋ふ幕が如何程深くとも其下に匿されたる榮は無限なり。此はエホバの充ち足れる御榮光にして、縱令「己を虛し」給ふといへど、現はされたる充ち足れる神の榮の輝は、「神と匹しく在ところの事を奪ひし事と思はず」との發表を拒むを得ず。信仰は此覆はれたる榮を知り、愛は燃ゆるが如き碑壁もて、其周圍を蔽ふ。「天に昇りまた降りし者は誰か。風をその掌中に聚めし者は誰か。水を衣につゝみし者は誰か、地のすべての限界を定めし者は誰か。その名は何ぞ、その子の名は何ぞ、汝これを知るや」(箴三十〇四)。

此を認はしたりとて僭越にはあらざるべし、然し恰もモーセの如く、主イエスの通行を見て頭を地に伏して拜するを學ぶべし(出三十四章)。

主イエスが僕の貌の下に、神の形體を匿し給ひし麗はしき實例を、聖書は吾儕に指示すなり。主が危險より避けて、御生命を保護し給ふ如き場合にも、如上の特質と關係とを有すと、余は主張せんとす。人間の目に隱れたる、主の麗しさと榮とを、斯く發見するは、靈の爲めに如何に價ある仕事なるかな。我儕は此榮光に、全く無一物にて接觸し得ると雖も、屢々是を理解する地位に立たず、此榮光が採る途と形式とを誤解する事あり。

神の子は來るべき而も全世界が驚嘆すべき御方とは、全く反對なる貌に於て、世に現れ給ひぬ。「我は吾父の名に靠て來りしに爾曹われを接すもし他の人おのが名に靠て來は爾曹これを接ん」(約五〇四十三)と、主自ら言ひ給へり。此れと一致して御生

命の脅かさるゝに際してや、世の見る所に於て、奇蹟とならず。反對に「己を虛うし」自らを何かとし給はず。人間の目前に奇蹟たるを、全く拒み給へり、是は「かれ凡て神と稱ふる者、また人の拜む所の者に敵し、之より超て己を尊くし、神の殿に坐して自ら神なりとし」、「この獸……地と其上に住る者をして、先に死んとする狀なりし、傷の愈たる獸を拜せしめたり……大小……の別なく或は右の手、或は額に印誌を受しむ、印誌すなはち獸の名あらざる者、あるひは其名の數あらざる者は、凡て貿易する事を得ざらしめたり」(撒後二章、默十三章)とは、如何に秀でし反對ならずや。

神の御子は如上とは全く反對なり、主は御自分の御名ならで、御父の御名によりて來給へり。主は自ら生命を有ち、「獨一死(ただひとり)ざるもの」と記さるゝ御方と、等しく在しながら、神の榮光の此輝を、人間即ち其生命を最も普通の方法によりて、保護せざるべからざる其人間の貌をもて、隱し給ふとは。如何に不思議の事ならずや。願くは吾儕の心禮拜もて充されん事を。己れの名をもて來らんとする他の者は、火を天より地に降して、休徵と奇蹟を爲し、先の獸の凡の權威をとらんも、神の御子はエヂプトへ逃れ給ひき。

吾儕の靈的理解は之を識り得ざる程に、薄弱なるが。斯く蔽はれたる榮光を發見するは、丁度吾儕に要求さるゝならずや。主は恩惠によりて此地位まで降り給しなり。其故は其障壁の背後に、榮光が隱存し、其榮光は御旨のまゝに、或は敵を、或はカルデヤ人の爐の火炎をさえ、無きものとし。最後に時充ちて暗きの勢の時に及んでや、勢力(ちから)の僕は彼の榮光の前に退き、且つ倒れたり。此事は主イエスが、後に心より犧牲となり給ひしが如く、亦全く自ら囚人となり給ひしを證明す。

註　女の裔、神の御子、肉體となりて顯れし神として主を想ひ、尙死が如何なる形式をもて主に對して向ひしにせよ、少しだに權利なきを想ふ時に、他餘の思想は排除せらる。肉と血を取り給ひし主を思ふ時に、主には罪のなきが故に、死は其權利を主に對して施すの餘地なく、主の完き生格に於て思へば、縱しや主が永遠の始めよりの約束に從つて、聖旨により死の下に御身を横へ給ふても、死は主に對して自ら接觸だに爲す能はざりき。故に主が其生命を普通の意味に於て、救ひ給ひしとの思想は、全く排斥すべきものなり。

是と關聯して、馬太十二章の場合に於ける主イエスを想ふに。此時に際して、パリサイ人の怒を恐れて、恰も人が其生命の安全の爲めに苦慮するが如く、主は感じ給ひしやと云ふに。決して然らで。僕としての其麗しき尊き行程を、ひるまず追跡し、而も此は世に於て、御自らの名譽を博せん爲めならず、却て御自身の謙遜と御死によりて、異邦人の依賴み、且つ信じて、罪人の救はるべき名を受けんが爲なりき(腓二章)。

ヘロデの劒が再度主を劫かしたる場合(路加十三章)を覗ふに。主は此脅迫に對して全き御威嚴もて向ひ給へり。王が如何に狡猾にて、狐の如き鋭さもて兇王の權力を振ふても、主は委ねられたる御業が成就する、豫定の行程を進まねばならず、又進まん

とし給ひき、主が茲に語り給ふ其御成就は、吾儕の知る如く、ヘロデ若くはユダヤ人が、主に勝つ事によりてに在らで、却て御身を棄てゝ救ふ君として、苦難によつて成就されねばならざりき。同じ場合に主は説明し給はく、若し豫言者としてエルサレムに死給はねばならぬとせば、而も此事實際となりしが、其場合には、エルサレムは其罪の量目を充たすと言ひ給へり。去りながら主は終始エルサレムの神に在し給ひ。此都を幾百年間、愛の忍をもて扱ひ、此れが爲めに勞し、而も今は直に廢墟として、審判にわたさねばならぬ方に在し給ふ(三十一—三十五節)。

繰り返して言はん、王の憤怒に劫かされ、其民よりは嘲弄と反抗を受けねばならぬ御方の、謙遜なる貌の下に、隱さるゝ榮光は如何ばかりぞや。

尙注意すべき一二の場合を擧んに、主が生れ給ひし邑に於ける、御活動の初期を見れば、同樣の高貴なる基礎が現れ居るなり、ナザレが打建られたる山は、主の御生命には危險なる場所にはあらで、却てエルサレムに於ける聖殿の頂の如き性質(路四〇九、二十九)を帶びたり。惡魔は主が若し聖殿の頂より、御身を投げたらんには、死給ふとは決して思はず。只誘ひて(樂園に於ける婦を誘ひし如く)御自身を崇めさせ、謂はゞエバに云ひたる如くに、神と等しくせしめ。嘗てアダムより奪ひし如く、キリストの中にある源泉を涸し、「勢より起る驕傲」を、御行爲の動機として、主に置かんと試みぬ。然し主イエスは僕の貌を守りて、飛び下り給はず、「主たる爾の神を試む可からず」とある如く、從順の御方として、御自分を記念せしめ給へり。

ナザレの山に於ても、此と全く同樣なり。假に山は聖殿の頂よりも高しとしても、是は主に取りては危險の問題にあらず。崖の下、聖殿の下、共に怪我なく居り給ふべし。而も其場合は、御自分の榮を求めんと來給ひしに非ずてふ聖書は如何で叶はんや。其故に「彼等の中を徑行て去り」給ひ。注目されで退きて、僕の貌を忠實に守り、其恩寵を現はし給ひぬ。

此れを主が其御生命を救はん爲めに、爲し給ひしと主張せば、甚だ不敬と云はざるべからず。斯かる考は「神肉體となりて現れ」と記されたる、主の御性格の榮光と、直接に抵觸す、主イエスは其肉體の御生涯中、信仰によりて、其面覆(おほひ)の下に輝く榮光を發見せらるゝ時は、屢々慰られ給ひき。ダビデの子、神の御子、イスラヘルのエホバ、世界の創造者として、信仰によりて、ナザレのイエスたる卑き貌の御方を識る時に、主イエスの御心は喜び給ひき。斯の如く今日に於ても僕の貌が、聖徒の腦中に浮び、其雲の後に隱されたる主の榮を發見せば、主の御喜び如何ばかり大なるか知れずと、斷言しても過たざるべし。

御幼少の時にベテレヘムより埃及へ逃れ給ひし事は、注目すべき美くしき出來事なり。曾てモーセの時に當てや、イスラヘルは恰も火の中にある棘に異らず、而も其先祖達の神の御同情と御前の故に、燒盡されで殘され。エホバはバロの上に在し、バロ

が民等を滅し盡さんとせば、エホバは此を妨げ、尙も其民の數を增し給ひぬ。此事は無論、民等に權利、實力のありし故にはあらず、蓋し當時のイスラヘルは、炎に遇へば忽ち燃え盡くさるゝ、棘に他ならざればなり。然し神の御子が、此棘の中に居り給ひし事が秘密にして。彼は後の日に、シャデラク、メシャク、アベデネゴと共に爐の中に在り給ひしが如く、イスラヘルと共に埃及に在り、棘が燃え爐が平常より七倍熱せられても、火の臭氣すら彼等には付かざりき。

是は實に大なる觀なりき、夫故モーセは近きて此を見んとせり。今日吾儕も、モーセの心もて、同し所を履み得るなり、出埃及記壹章より十五章を讀み、彼の不思議なる觀を見て、何故棘が燃えて、而も燬けざるやを尋ねなば、此イスラヘルなる、憫なる棘が、エヂプトの爐の中に在て、燃たえざる所以は、神の御子が現在し給ふに歸すと、確信するを得ん。火が如何に激しくなりても、此れは到底勝つ能はず。如何なる仕方にてイスラヘルが、結局エヂプトを去りしやと云へば。恰も後の日に、三人の若者が、ネブカデネザルの熱爐を去りしが如く、其縛られし繩紐が燒けし他は、何の損害だになく、全く勝利に於てなりき。パロは埃及の全軍を率ひて、紅海に來りしもイスラヘルは主の旗の下に出で去りたり。

扨て問はん、埃及に於けるイスラヘルは、神の御子の體恤を以て、蔽はれし際には肉體となりて顯れし神なる主イエスと同樣に、安全なりしや。イスラヘルと云ふ棘は埃及の火力に耐へるではない乎、主イエスの取り給ひし御謙遜の肉體は(縱しや人間の敵對、王の嫌惡、學者の嫉妬、人民の怒に遭遇し給ふとも)、神が此肉體に於て現はさるゝ場合には、決して接觸し得べきものにあらず。燃ゆるが然し燬けざる棘の奧義は此所に在り、イスラヘルは神の御所定以外に難み能はざりき、其故は神の御子の體恤が、此れと共に在ればなり、又イエスには聖旨以外に接觸し能はざりき、其れは神の御子が肉と血とを具へ給へばなり。

「我わが子をエヂプトより召出せり」は、イエスに取りても、イスラヘルに取りても眞實なり、主イエスもイスラヘルも、共に當時は燃ゆる處の、而も燬けざる棘なりき、外見と人間の判斷に從へば、弱けれど又觸るべからず。兩者共に其生命は觸れ難きものなりき、此はイスラヘルが神の御子の體恤を受け、イエスが肉體に於て現れし神たる御方に在すが故なり。

「嬰兒」は其生命を救はんが爲めに、エヂプトへ逃れ。イスラヘルは其生命を救はんが爲め、昔エヂプトを去り。シャデラクと其友儕は生命を救はんとて、カルデヤの爐を出でぬ。然しイスラヘルの生命は、エヂプトの國外同樣、國內にても安全。ユダヤの若者等は爐中に於ても、其外にても燬かるゝ事より取除けられき。イスラヘルは其救主エホバの榮光を見んが爲めにエヂプトを去り、イスラ ルの三人の若者も亦此れと同樣なりき、同し仕方と同し目的にて、「嬰兒」はヘロデ王の怒を避けて、ユダヤを

去り給ひぬ。神の御子は僕の貌を取り。己れの名にあらで、御父の名に於て來り給ひ。御自身の榮を棄て、空しくなり、僕の貌を實現して、「嬰兒」にて在す時より其途を辿り、尙他の御謙遜に於ては、縱しや外觀は王の憤怒に對して、御生命を守るが如くありても、御自身を遣し給ひし御方を榮むる爲めに、服從してエヂプトへ逃れ給ひぬ。

主が完き僕の貌を取り給ひし事をもて、其御生格を下げ給ひしとは、決して言ふべからざるなり。主は觸るべからざる御方にして。御時が來り、御自身を棄てんと準備し給ふ以前には、上吏が假令屢々主を捕へんと、下吏を遣しても、全く無益にして。主は彼等の手を避けて、或時はエヂプト、或る時は他の邑へ逃れて、御身を卑うし給へり、卑められ擯斥されたる人の御子。此服從の奧義、神の御子の御隨意の服從を、輕薄なる仕方にて論じ、覆を不敬なる心もて上げ得んや。如上の例證をもて、主が取り給ひし肉と血との死を證明せんとせば、此は不敬なる汚れたる手をもて、蔽を引き明けんとするに異らず。加之是は主に對して不正にして。吾儕に對する主の無限の恩寵と慈愛、並に神に對して御自身を虛うする、御從順の現はるゝ御行爲によりて、却て主の御生格を下げんとするものなり。

人或は今日に於ては、自然若くは或る威力、若くは偶然の出來事が、主イエスの取り給ひし肉と血とに對して、勝利を得、斯くて我儕の場合の如くに、主の御死を惹起したりと、主張する者あれど、斯くの如き思想は、主イエス・キリストに罪ありとするものなり。或は斯る意味には非ずと云ふものあらんも、實際は然るなり。夫故に聖靈の示さるゝ肉と血との歷史（此れをもて我儕は判斷す）に從へば、死は罪の故に世に入りたり。我儕の主の御身に於ける肉と血が、主の御隨意の御献身以外に、性質又は境遇の故に、死給はねばならぬとせば、其間に必ずや罪との關係を認むと云はざるべからず。果して然らんには、キリストは靈の爲に何にかならん。此宣告は恰も主を死の權下に置くものと云はざるべからざるなり。彼等の言に從へば、主は僕の貌を取り給ひし際に、死を自ら取る能はで、却て死に打負かされ給ひしが如し。然し神は讃むべきかな、主は其御性質に從つて、御隨意に受け給ふより他には、何にも服從し給はざりき。

若し彼の前提の如くんば、「陰府の門」が敎會の「磐」、即ち神の御子の御生格に打勝つてふ事を、實際に恐れざるべからざるなり。若し亦之れが。主の眞に人に在す事を明かにするてふ口實の下に述べられんには、此主張は益々疑はざるべからず。其故はキリストの御生格に於て見る處は、單に人間に在すやと問はざるべからず。否其れ以上にして、吾儕は肉體となりて現れ給ひし神御自身を見るなり。キリスト若しエホバの伴侶(亞十三〇七)に在し給はずんば、罪人なる我の救主たる能はず。萬物は此れを生じ得る者に負ふ處なり。神と匹く在すところの事を奪掠と意はざる唯一の御方が、僕の貌をとり得るなり、其故は他の萬物は前言する如く、既に僕なればなり。萬物は

其爲すべき事以上を爲す能はず、此以外の思想は神に對する反逆なり。誰か人間の擔保となるの能力を有せんや、僭越なしに神と匹しくある權利を有し、從て獨立に在り得る唯一の御方のみが、此事を爲し得るなり。

純人性には犯罪の能力あり。アダムはエデンの園にて此れを證明せり、其は彼、罪を犯したればなり、彼は犯罪と死との能力を有すと、確言し得るなり。歴史は前者を證明す、然し死は罪の故に世に入りしと云ひて、後者の的確なるを妨げんとす。性質として犯罪の能力あり。然し死の可能性に就ては、一言する處なし。

されば時代の經過と共に、人或はキリストの眞の人なる事を明かにせんとの口實の下に、罪の能力若くは可能を彼に對して主張せんとせば、余は斯る靈狀に對して答ふる處を知らず。余はキリストを識る各自に、此答を任せんのみ。然し同時に、敎會の磐なる神の御子の御生格に對する、斯かる攻擊の背面には、サンタが潛伏すと確信するを得ん(太十六〇十八)。其故はキリストが神に在さずば、其業、證並に死すらも、絶對に無意味なればなり。彼の生格は實に其犧牲の力にして、此意味に於て其御生格は吾儕の磐なり。丁度主の御生格に對して、ペテロの認言は(當時ペテロは未だ主の御業と犧牲とを識らざりしも)、神の御子をして、敎會の建られたる磐に就て語り、同時に陰府の門、サタンの權力と計略如何に働きても、到底勝ち得ぬ、其眞理と秘密とを現さしめぬ。

彼等は此誘惑を始より爲し、今も尙爲せり。アリヤン並にソチニヤンは既に久しき古に於て、「肉體となりて顯はれし神」の完き榮光を、多少僞の仕方もて曇らせんとし。數年前には、「萬物の上にありて世の稱讃を受くべき神」なる、御人キリスト・イエスの御德性は、アーヴイング並に其門弟より、猛烈に攻擊されたり。尙斬新なるは、不潔なる行動にして、此れは主イエスと神との關係と、主が生活し給ひし靈の御經驗とを人間的理解の中に置かんとし、今日にては人々主の御肉と血、即ち主の御身の殿を拒まんとす。

凡て此等に於て、同し目的即ち神の御子の御謙遜を見る事は、困難ならざるべし。而して凡て此等は、那邊より來り。又凡て此れに反する熱心は、那邊より來るや。御父は御子の榮光に關するより、其れ以上の熱心もて注意し給はず、事の細大となく、主を卑ふする凡ての事に對しては、反抗し給ふ。主が約翰傳五章に於て、ユダヤ人に向て云ひ給ひし御言を見る時は、縱しや御子が自らを卑ふし、又御自ら言ひ給ひし如く「何事も自ら行ふこと能はず」といへど、而も御父は御子が不敬を加へられ、若くは少しだに輕しめらるゝを、決して見逃し給はで、嚴格壯大なる御權利に於て、御子の神たる御充分の權利を守り給ふ、「子を救はざるものは之を遣しし父を敬はず」。

單純なる不識の者に對し、忍耐して敎ゆるは、實に神の途、聖靈の途なり。主自らも、「ピリポ我かく久く爾曹と偕に在しに未だ我を識ざるか」と云ひし時には、此途を

歩み給ひき。然してキリストの御謙遜は、決して主御本來の地位に相當せざるも、亦神の途なるなり。約翰の書は此を我儕に證明す、該書は特別に御子の御性格の御榮光を取扱ふが故に、神の最も美しく、又壯嚴なる認はしを有し。我が見る所によれば、此書は此榮光を汚し、若くは此榮光を凡ての熱心と忠實とを以て守らざるものに對しては、少だに容赦せざるが如し。

崇められたる吾儕の主の歴史上の他の事例へば饑渇や疲勞は、主の肉と血とが、死ぬべき狀態にありてふ思の、證左にはならざるなり。肉を取りて來給ひし神の御子は死若くは其他の事情に蔽はれざる御方なり。エデンの園以外の物には主の分なし。主はサマリヤの井の傍にて飢疲れて居給へり。一日の疲れ多き御服役の後に、船中に寢ね給ひぬ。然し此世の荆棘や薊、御顏の苦痛や汗を經驗し給ひしは、言ひ盡されぬ恩寵に於て、自ら取り給ひし彼の「僕の貌」を實現するに外ならざりき。「悲哀の人」が或る機會に、五十歳位と(約八〇五十七)云はれ給ひし際には、此は如何なる仕方にて、主が我儕の幸福と、御父の榮光との爲めに、疲勞と、苦痛と、艱難を受け給ひしかを思はしむ。主は我儕の爲めに苦み、罪人の反抗を忍びし故に、「その面貌はそこなはれて人と異り」(賽五十二〇十四)給ひき、然し御年齒の自然の結果として、力を失ひ給ひしにはあらず。能力の傾などいふ事は主に在ては絶無なり。

ユダヤ人は主を殺せしものとして、幾度も非難されぬ(徒二〇三十六、三〇十五、七〇五十二)。又事實之に相違なかりき。否我儕も亦同し判決の下に在るもの。殺人の罪は吾儕の門戸に伏せり。完き審判の意味に於て、ユダヤ人は「主を排斥せし人、又殺せし人」なり。理解に從へば之は奇異に見えんも、吾儕の見る所は信仰の判斷によつて完全なり、「わが父われを愛す、蓋われ再び命を得んが爲めに、命を捐るが故なり。我より之を奪ふ者なし、我みづから之を捐るなり。我これを捐るの權能あり、亦よく之を得の權能あり、我父より我この命令を受けたり」(約十〇十七、十八)、主は御自由なり、然も命令の下に立ち給ひぬ。余は繰返さん、此等凡ては理性と不信には最も不思議なるも、信仰の斷定に從へば完全なりと。

神の御子は、神なき人の手に釘付けられて、木の上に死給ひぬ。して神の永遠の御旨と恩寵とは、主を此處へと導き給ひき。彼處に主は死に而も其處に在りし事の故に死に給ひき。羔は屠られぬ。誰か此事に反對し得んや。神なき手は主を殺したり、然し神は其祭壇の羔として主を眺め給ひぬ。斯かる重大にして貴尊なる秘密に、誰か一瞬たりとも接近し得んや。而して事斯の如しといへど、羔は其生命を自ら捐て給へり。其死は十字架の苦難に伴ふ失力や、破碎の結果にはあらで、主は實に其生命を自ら捐て給へり。自ら捐てしものを完全に占有し居給ひし證據には、「大聲に呼ばはりて氣絶えたり」。此瞬間の歴史は、少しだに他に思想の餘地を與へず、尙聖徒の禮拜的の愛は、同樣に他餘の考を許さざるなり。ピラトはイエスの已に死しを奇めり、是

を信ずるを欲せざる故に、其事實を確めん爲めに、百人の長を呼びたり（可十五〇四十四）。主が十字架にて過し給ひし時間は、生命を絶つには充分ならざりき。是故に二人の盗賊の脛を折らねばならざりき。然し主は已に死給ひしが故に、ピラトは之を信ずる前に、其目擊者に質問せざるを得ざりしなり。

此故に上述の眞理は事實の詳細なる文字通りの歴史を説明するに足る。恩寵の働くによりて、吾儕の靈は、屠られし羔、即ち吾儕の爲めに死なんとする、既に死したる又殺されし救主の斯かる御光景の爲めに、神を稱讃す。吾儕主が屠られし羔たるを拒まんや、若くは殺され給ひし羔は、其生命を自ら捐てしと主張しつゝ、此秘密を祝する天の歌を、半途に廢する能はんや。聖靈自ら記述されたるゴルゴタの歴史は、明かに此眞理を宣言す、吾人は繰返して云はん、主張する所は此歴史を説明するに過ぎざるを、イエスは御自在なり、而も命令の下にありき。信仰は能く是を理解す、此奥義に從て吾儕は時の至るに及んで、主が「首を俯て靈を付せり」（約十九〇三十）と知らせらる。主は其受給ひし命令を承認し、死に至るまで從順、而も御生命を自ら捐給へり。

前述の如く信仰は困難なく凡て此等を了解す、否此中のみに眞の完全の奥義が存するを了解す。イエスは萬軍の主の伴侶なる人にありながら、神の聖約趣旨に自ら服從して死給ひき。

我等既に繰返して主の讃美にまで述べたるが、神の御子は此世に於ては其榮光、即ち神の體を僕の貌にて隱し給ひぬ。主の榮は神の支配する有ゆる部分に認められき。惡魔は之を承認し、人の身體と靈とは之を承認し、死と墓と、野の獸、海の魚、風や波、穀物や、酒ですらも之を承認せり。余は言はんイエスのみが之を承認せず、即ち御自分の幸福の爲めに、之を用ひざりし唯一の御方なりし事を、其故は主の仕方は、此榮光を隱すにあればなり。主は收穫の主に在し給へど、野の農夫の一人の如く現れ給ひぬ。主は殿の神、安息日の主に在せども、不信な世界の要求や權利の下に暇從し給ひぬ。

斯の如く主は其榮光を、幔若くは雲を以て、屢々蔽ひ給へり、御生命が危き折に於てすら前述せる所と全く一致して行ひ給ひき。凡て此等の場合に於て、主は實に全く侮らるゝ貌の下に、其榮光を隱し給ひしと云ふを得ん。或時は民等の厚意の下に御身を護り（可十一〇卅二、十二〇十二、路廿〇十九）。或時は普通の若くは不思議なる仕方にて避害し（路四〇三十、約八〇五十九、十〇卅九）。又敵の時未だ至らざるが故に措手せられず（約七〇卅、八〇廿）。又一度は主の御生命を奪はんとする、王の怒を怖れて、埃及へと逃げ給ひき。

此等凡てに於て余は終始、榮光の主が、御自分の御名ならで、他の名に於て來給ひし如く、御身を隱し給ふ事實を見る。而も彼は「榮光の主」、且つ「生命の君」に在し給ふ、主は前言せる如く、自ら擇らんで捕縛せられ、地上に於ける御過程の最後に於ては

自ら進んで犧牲となり給ひ。「おほくの人に代て生命を予へその贖となり給へり」（太廿〇廿八、多二〇十四）。

註　神の御子は吾儕を救ふて、神の榮光を現はす爲めに、父の命令に從ひ給へり（約十〇十八、十二〇四十九）、而しで今や御父は、吾儕が此の御子に對して、神に適はしき有ゆる尊敬を示し、約言すれば、其御生格の眞理に於て行ふべき命令を吾儕に與へ給へり（約五〇廿三、壹約三〇廿三、二約四一六）。

主の契約の櫃は、曾て一度敵の掌中に、即ちペリシテ人の爲めに、エベネゼルの戰の際に、奪はれし事在り。「その力をとりことならしめその榮光を敵の手にわたし」（詩七十八〇六十一）たるも、此櫃は觸るべからざるものにして。縱し外觀は木と金より成れる薄弱の物なれど。其實在は不割禮のもの、其偶像、其人民、其土地を不安にせり。櫃は護衛なく、而も勝利もて熱狂奮激せる敵の眞中に、單獨に在り。何故人々は之を破らざりしか。何故斷崖に投げて碎かざりしか。櫃は常にペリシテ人と道を共にし、恰も此民の隨意に處分し得らるゝが如し。然らば何故に彼等が之を實行せざりしやと云ふに。其答は極めて簡單にして、唯彼等に不能なるに在り。ペリシテ人の中に於ける契約の櫃は、恰も燃え且つ燬けざる棘の如し。縱し割禮なき民の權下に全く在るが如く見えても、實際は觸るべからざるものなりき。ペリシテ人は之をアシドトよりガデに、ガデよりエクロンへと移し得たるも、誰も之を毀つ爲めに觸れ能はざりき（母前四—六章參照）。

同樣に眞の契約の櫃、即ち肉に於ける神の御子は、暫時割禮なき者の蹴鞠とせられ給ひ、ピラフトは主をヘロデへ、アンナスはカヤバへと送り、民等は主をピラトへ引き、ピラトは再び人民に渡し得たり。然し主の御生命は彼等の範圍外にありき。主は神の御子にして、肉に於て現れ給ひしとはいへ、永遠よりの御子に在しぬ、如何なる困難に接し、如何なる疲勞、飢渴に陷りても、是等は只其自ら取り給ひし、僕の貌を實現するに役立しのみ、主は變らざる御子にして、其衷に生命を有ち、觸るべからざる契約の櫃、此世の憤怒の火焰によりて、燬ざる棘に在し給ふ。

此は我疑ひ得ざる奧義なり。然し是を記載して、此等の事項を我が靈の眞底よりの望もて、我が爲めにも多少の利益もて考ふる場合にも、神の櫃がペリシテ人の地より、其故土に戻りし日に、當時の眞の忠義なるイスラヘル人が、感ぜし事を追想するより大なる幸福はなしと思ふ。其悅は如何に大なりしぞ、又其稱讃と感謝は如何に眞底よりなりしぞ。縱し其場所よりは多少遠隔の地に住せしにせよ、大事件が實際に發生せし爲めに、如何に大なる注意を惹起せし事よ、其故はイスラヘル人に取りては、縱し如何なる族に屬し居るにせよ、櫃が再び安全にせられ、割禮なき者が最早其邑を此處其所と、無法に動かし得ざるてふ事は、莫大なる必要なればなり。然して假令此點に

關しては、滿足なる結果を得たりとするも、民等は自ら櫃に觸れ、若くは覗き、若くはペリシテ人より取り返されし後に於てすら、彼のベテシメシの人々の如く、櫃に對して罪を犯すは注意せざるべからざるなり。

吾儕の主の身體の死ぬべき狀態に關する、凡ての思想を斷然排斥するは、確かに良しき事なるべし。斯かる言語や理解は、不割禮者即ちペリシテ人の手を以て、契約の櫃を動かすに恰も等しきものにして。我儕は單に誤れるのみならず、不敬なる斯かる思想を明かにし、契約の櫃が全く自由に我儕に戻りたる事のみを以て、滿足せざるべからざるなり。然も此時に當りて尙他の義務は、即ち普通の事として之を論究し去る能はざる事にして。吾儕の語は少きを要す、其故は實際に斯かる場合に、「言おほければ罪なきことあたはざればなり」(箴十〇十九)。斯かる問題に對して、物理的觀察は、縱し其れが正確不抗のものにても、容るべからざるものなり。蓋は人間的理性の靜想は、聖靈により神の智慧に由るものに非らざればなり。主の身體は殿なり、記して「爾曹我が聖所を敬ふべし我はエホバなり」と。

人若し斯の如き思考を否み、此に對して責任を負ふ代りに、非難せんには、余は何も云ひ得ざるなり。多くの靈は其度に越え、又聖書の指示す所に過ぎ、吾儕の理解以上の物もて、恐らさるゝ事あるなり。余は此際に次の語を追想す、曰く「愚なる者の痴にしたがひて答ふること勿れ、恐らくはおのれも是と同じからん」(箴廿六〇四)。

然し神の御子の生格に關する此思は、他に其始を有す。契約の櫃は割禮なき者の手に落ちたり、余が敢て爰に記す處は、其所より之を持歸らんと試むるものなり。之を新らしき車より下ろす事(代上十三〇七)が、余の深き願にして、元より斯かる任務に際しては、遠慮と敬虔を要す。

余は尙附記せんに、現下の全爭點は、神の恩の御導によつて、靈に利益あるべし。獅子の屍(斯かる事は不當の事なれど)は、昔に於ては美味滋養なる蜂蜜を出さゞるべからざりき。パウロも後の日に、少しく不快の務なれど、コリントの聖徒に逆ひて、甦の敎を說かねばならざりき。然し此務は恰も獅子の屍の如くに、効果を奏しぬ。彼は敎務のみを傳ふる爲めに勉めずして、却て他に對する此奧義の榮光が、使徒の靈眼を遮りぬ。聖靈によりて甦を其序、其異れる時代に從て眺むる事が、彼に與へられ、尙中間時たる此時代、並に神の豫定に從て各時代に起るべき事件、其他は此時代の最後のものに續く狀態、終に聖徒が其力と榮に於て、ラッパの響と共に甦る事を敎へられき(哥前十五章)。斯くの如くに、爰にも幾度か繰返して、獅子の屍より蜜を得たり、其は兄弟間の爭議は此れと同しく抵觸的の現象なればなり。

然し曾て記されたる語は、神の溢るゝ恩惠によつて、今日尙適中す、「食ふ者より食物出で强き者より甘き物出でたり」(士十四〇十四)。

露光量違いの為重複撮影

311
544

「エホバよ榮光をわれらに歸するなかれ、われらに歸するなかれ、なんぢのあはれみと汝のまことの故によつてたゞ名(みな)にのみ歸したまへ」(詩百十五〇一)。

昭和二年二月十二日印刷
昭和二年二月十五日發行

版權所有

發行所　東京市麹町區富士見町一丁目一番地
日曜學校
印刷者　東京市麹町區富士見町一丁目一番地
中村孝雄

發賣元　東京市麹町區富士見町一丁目一番地
三育社書店
電話麹町二九七五番

露光量違いの為重複撮影

.11
544

昭和二年一月十二日印刷
昭和二年一月十五日發行

「神の子」第壹輯
定價金五拾五錢
送料四錢

著作兼發行者　鈴木善吉　東京府豐多摩郡杉並町高圓寺七二四

印刷者　中村守雄　東京市神田區三河町一丁目七番地

印刷所　東京旭印刷株式會社　東京市神田區三河町一丁目七番地

版權所有

發兌　東京市神田區表神保町十番地
三愛社書店
電話神田二九七五番

終